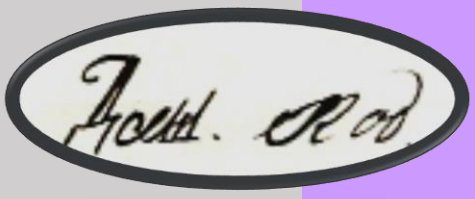
ISSN　2435-3523

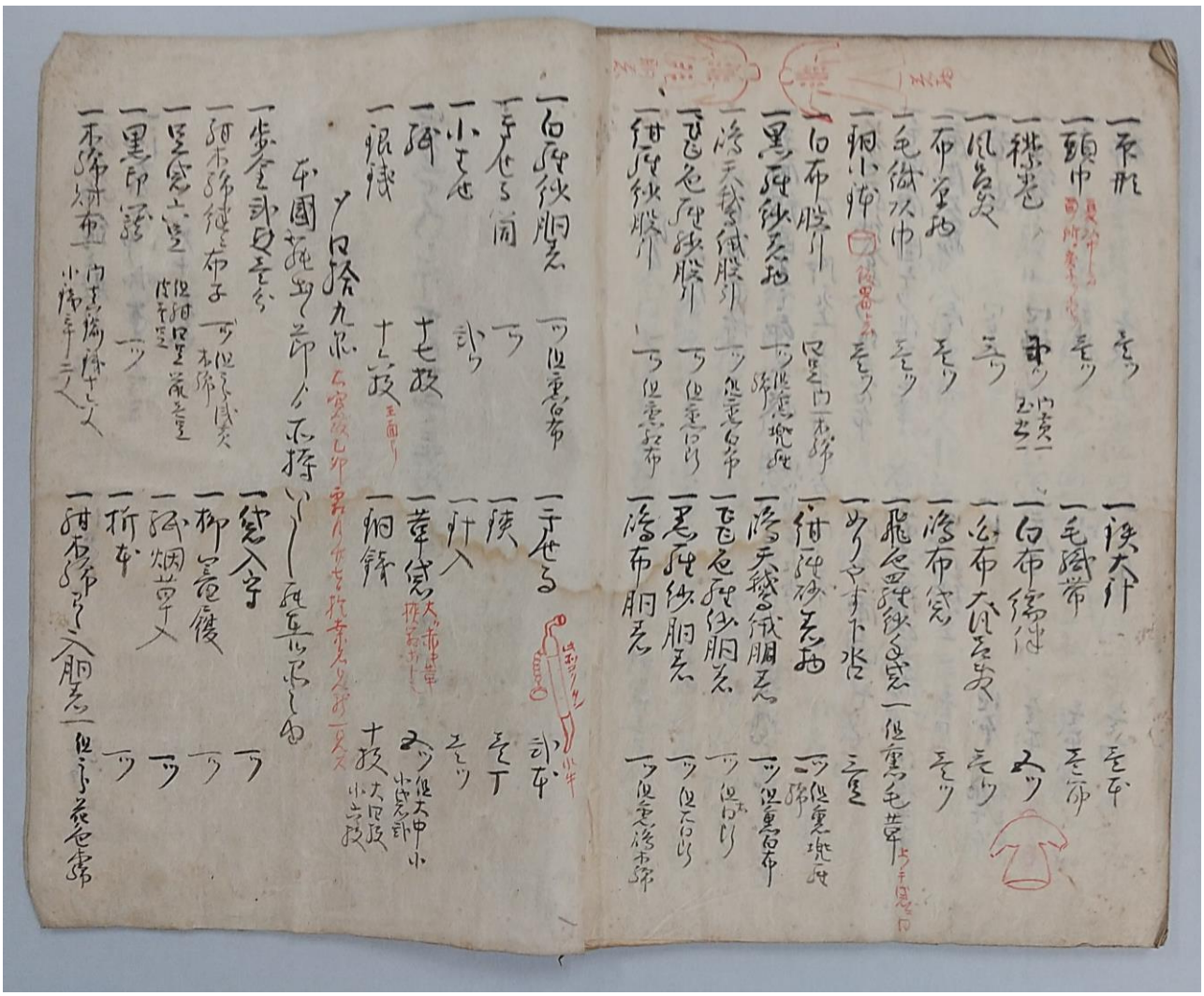
ダイコー

大黒屋光太夫記念館だより

31 号



2023 年 5 月



「漂流小記」（松野家文庫）　鈴鹿市

大黒屋光太夫記念館

〒510-0224
三重県鈴鹿市若松中一丁目 1-8
Tel&Fax 059-385-3797

開館時間/10:00-16:00
休館日/月・火・第 3 水曜日
年末年始
入館料/無料

令和４年 度特別展終了しました

特別展「光太夫とはじめて物語」は，大黒屋光太夫が帰国して 230 周年になることを記念し，大黒屋光太夫について，ロシアを横断した鈴鹿の偉人というイメージからさらに踏み込んで，西洋の文化を紹介した人物としての帰国後の功績にも注目していただけるように企画しました。

当初，秋に予定していた企画でしたが，新型コロナウィルス感染拡大の影響で延期の判断となり，令和５年１月 19 日から３月 19 日まで無事開催することができ、800 名近くの来場者がありました。

展示は，①「ラクスマンの来航」によって日本にもたらされたもの，②光太夫が日本にはじめて紹介したモノや情報，③光太夫らがもちかえった異国の道具　の３章構成しました。また，現在関心が高まっているウクライナの文化についても，光太夫が言葉や歌謡を日本に紹介していることに触れました。光太夫が情報として持ち帰ってきたバラライカやフォルテピアノについては，奏者に依頼して動画を作成し，実際にその音色を聴いていただくように工夫しました。

今回の展示は，光太夫について今まで関心が薄かった層や子どもにも興味を持ってもらい来館してもらえるように，ポスターやチラシもポップなイメージにし，展示内容もわかりやすい内容で展開す

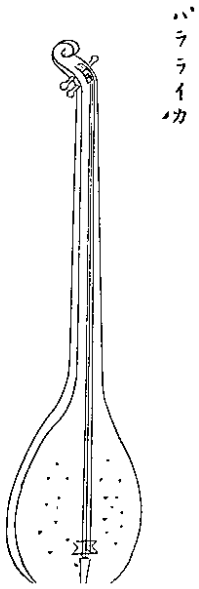
ギャラリートークの様子。２回とも約 30 名の参加がありました。横浜や大阪からの参加者も。

光太夫とはじめて物語３

バラライカは、ロシアを代表する民族楽器で，ギターと似た構造をした弦楽器です。『北槎聞略』には「バラライカといふものあり。状は此方の三弦のごとくにて面を薄板にてはる。二弦、三弦二種あり。」とあり，光太夫は実際にバラライカを目にしたことがわかります。

バラライカは十七世紀ごろロシアで誕生し、十九世紀末に改良されて現在の形になりましたので、光太夫が目にしたバラライカはよく知られた三角形の共鳴胴（音を響かせるための箱）ではなく、弦の数も３本以外に２本のものもあったようです。

現代のバラライカ（北川翔氏蔵）



岩波文庫版『北槎聞略』より
バラライカの図　まだ三角ではない

モニターとスタンドパネルを設置しました

特別展で設置したモニターを引き続き利用して，展示していない資料や記念館周辺の光太夫関連史跡，過去のイベントなどの画像をご覧いただけるようにしました。

また，「大黒屋光太夫・磯吉画幅」のスタンドパネルを神昌丸模型の前に設置し，一緒に写真を撮っていただけるようにしました。

小市の遺品の展覧会

光太夫の仲間は、10年に及ぶ漂流・漂泊の厳しさから次々と倒れ、命を落とし、あるいはロシアでの永住を決意していきました。そのなかで、厳しい条件にも屈せず、最後まで望みを捨てずに帰国することができたのは、光太夫と磯吉と小市の 3 人だけでした。しかし、小市は、北海道まで帰還したものの、故郷の土を踏むことなく、寛政 5（1793）年 4 月に根室で壊血病により亡くなってしまいました。

翌寛政 6（1794）年、小市の所持品は、幕府の意向により、若松村で健在だった妻のけんに下げ渡されることになりました。江戸から亀山に到着したその遺品は、亀山の大庄屋・打田権四郎らによって封印され、若松の大庄屋である加藤要助へ渡されました。遺品を受け取った村役人たちは、亀山藩の許可を得て、小市の追善供養を小市の菩提寺である若松村の宝祥寺で執り行いました。その時に、小市の遺品 59 点が故郷の人々にはじめて公開されました。

やがて、若松村では、小市の遺品を各地に貸し出すようになりました。若松村では、小市の供養のためという名目で、亀山藩から内々で貸出しの了解をとりつけたのです。借り主は「小市の位牌に香典を差し出す者たちに遺品を見せるだけで、見世物がましいことはしない」と約束したうえで借り受けていますが、実際には小市の供養を名目とした遺品の展覧会が目的でした。寛政 7 年に名古屋大須の七ツ寺で開かれた際には、高力猿猴庵によってその様子が詳細に描かれています（「猿猴庵合集」）。各ブースに解説員が配置され、見学者に展示解説をしているあたり、現在の展覧会に近いものだったようです。大信寺（四日市）に貸し出した際に出された書状からは、市の妻・けんへの心付けとして、若松村が 1 日つき 200 疋の貸出料を取っていたこともわかります。借り受けた寺も、小市への香典という名の入場料を徴収していました。小市の遺品が評判を呼び、それを見せる展覧会ビジネスがにわかに成立したと言えそうです。

令和 4 年 8 月に鈴鹿市が寄贈を受けた松野家文庫の中に「漂流小記」（表紙参照）という冊子があります。「漂民御覧之記」を中心とする光太夫の漂流記の写本と位置づけられますが、巻末の小市の遺品の一覧には朱字の書き込みがあり、松野氏のご先祖が寛政 7 年（1795）に小市の遺品を桑名で観覧したことが記されていました。神戸藩士が桑名まで小市の遺品の展覧会を見に行ったのです。こうした小市の遺品の展覧会は、年代がはっきりしているだけでも、寛政 7 年に名古屋の七ツ寺（大須）、寛政 11 年には伏見桃山、文化元年（1804）には北伊勢で開催された記録が残っています。他にも、津や四日市で開催されていたこともわかっており、今回桑名での開催が明らかになったように、記録で把握している以上に各地で催されていたのでしょう。

そして、こうした催しにトラブルはつきものです。円福寺と一音寺は、小市の遺品を借り出して展覧会をする予定で準備していましたが、直前になって部田（津市）の別の寺院が先に借り出す約束をしていたと主張し、貸し出しの順番を巡ってトラブルになっています。こうしたイザコザの記録も小市の遺品の人気を物語る逸話のひとつです。

海外の情報が極端に制限されていた当時の人々にとって、小市の遺品の展覧会は、海外のものを実際に目にするまたとない機会でした。当時流行していた秘仏開帳や見世物興行などとおなじく好奇心をくすぐる絶好の機会だったのかもしれません。小市の遺品を目にした当時の人々は、海の向こうの世界にどんな思いを抱いたのでしょうか。

（小市の遺品は、大半は劣化して処分されてしまったため、現在は 16 点が現存しているのみです。令和 2 年に鈴鹿市の有形文化財に指定されました。）

ラクスマンの故郷・フィンランドから

2023 年 3 月 4 日、ラクスマンの故郷であるフィンランドのサヴォンリンナ市で、ラクスマンソサエティを立ち上げるなど積極的にラクスマンの顕彰活動をされている岡部千栄子氏が、4 年ぶりに記念館を再訪されました。今回の訪問では、記念館の特別展を見学された後、江島若宮神社と白子港緑地公園を見学され、文化財課職員や大黒屋光太夫顕彰会の会員と情報交換されました。2020 年秋に岡部氏と顕彰会を中心に企画されていたサヴォンリンナ芸術高校と神戸高校・若松小学校との交流イベントは、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大によって中止を余儀なくされましたが、いつかまた大黒屋光太夫とラクスマンの故郷をつなぐ企画を実現させたいという思いを新たにしました。

3 月 20 日には、フィンランド国大統領から岡部氏に「白い薔薇の騎士」勲章が贈られたそうです。岡部氏は「今回の受賞理由は近年の思いがけない大黒屋とラクスマン関係のイベント開催提案者としての要素も大きく影響したであろうと思います。この勲章は私だけでなく御親切及び御支援頂きました皆様と共にあると信じております。」と受賞にあたってのコメントを寄せて下さいました。

また、岡部氏が指導されているサヴォリンナ芸術高校では、「大黒屋とラクスマン物語」と題した演劇の制作がすすめられてきましたが、4 月 15 日に卒業公演として封切られたそうです。

新型コロナウィルスの感染拡大やロシアのウクライナ侵攻など不安定な世界情勢の中、お互いを行き来することすら難しい状況が続き、この 1 年は、ロシアを含めて企画されたセミナーの延期や内容変更なども経験しましたが、光太夫とラクスマンの友情のように、いつか花咲く日を信じて、草の根の交流を地道に続けていきたいと思います。

卒業公演の様子

おしえて！こうだゆうくん　第 3 回

小市の遺品

※食べられません!!

発　行　513-8701 鈴鹿市神戸一丁目 18-18
鈴鹿市文化スポーツ部文化財課
TEL059-382-9031　FAX059-382-9071
発行日　2023 年 5 月 15 日